

---

# 中古ゲームの香り

執事神

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

中古ゲームの香り

### 【Nコード】

N0941Y

### 【作者名】

執事神

### 【あらすじ】

放課後プレイ あの手続きです

前回までのあらすじ

ギャルゲーをしてるところを見られた彼氏は、彼女にゲームを奢ることになったのだった。

彼氏彼女一行は電車でひとつ駅を降りた所にある中古ゲーム屋に向かった。

「久しぶりにここきた」

彼女はプレハブ小屋のような天井を眺めた。

「俺も久しぶりだわここくんの」

彼氏も辺りを伺いを立てるように見回した。土の混ざったようなキツめの香水の匂いが鼻を刺した。長居は避けよう。彼氏は思った。

彼女はW〇iのソフトが並ぶ棚に立ち止まった。まず目利きでソフトを選ぶようだ。彼女はまずこれだと思ったソフトを手に取り、彼氏に見せた。

「これどうよ」

「どうよって言われても……」

彼氏は困惑した。やったことないゲームをどうだと聞かれて分かるはずない。

「いいんじゃないか？作ってる会社はまともだし」

「何その感想」

「やったことねえんだから仕方ないだろ」

彼女はつまらなさそうに引つ張り出したソフトを棚に直した。そして再び目利きを始めた。無論、彼女にもゲームの知識はないに等しい。面白そうなものは積極的に取り入れるタイプなのだ。

「じゃあこれ」

「また格ゲーかよ」

彼氏は溜まらず呆れ顔だった。彼女が引つ張り出したゲームは、2D対戦型格闘ゲームだった。しかも型はなかなか古めの。

「今更やってどうすんだよそれ。もうほとんどのゲーセンもそれ撤去してるぞ」

「マジで」

彼女はソフトのパッケージを見た。そこには黒髪の男と金髪の男が罅迫り合いをしていた。

「…やめた」

「今やるならブレ○ブルーだろ」

「ああ、このゲームあの系列なの」

「キャラがどことなく似てるだろ」

彼女は頭の中で振り返ってみた。なるほど、確かに似たようなキャラが複数いる。彼女は名残惜しそうにソフトを棚に収納した。

「もう、じゃああんた選んでよ」

「俺!?!」

彼女は面倒くさくなったのか。とうとう彼氏に選べと頼みだした。

「いいじゃねえか適当に選んでよ。どのみち金出すのは俺なんだから」

「面白くないもん買ってどうすんのよ」

「知らねえよ、そこはお前のセンスだろが」

彼女は珍しく論破されたのか、悔しさに棚を一回蹴ると、再びゲームを見出した。彼女は無理に難しい顔をしながら、タイトルに指を這わせる。

（一生掛かっても見つからねえなこりゃ…）

彼氏は肩から大き過ぎる溜め息を吐いた。仕方なく少しだが助け舟を出すことに。

「これなんかどうだ？」

と、彼氏は彼女の趣味にはちょっと違うファンタジーものを手に取った。

「何それ」

「俺も分からん。ただ呪われた女の子が肉を食べるだけ」

至って奇っ怪なストーリーであつた。

「意味不明だからパス」

「結構面白いらしいぞ」

彼女はそれ以外何も言わず、棚を指差して、戻せという意を露わにした。彼氏は不満そうにそれをしまった。

「他なんかある？」

「なんかあっても却下だろが」

「他には！」

彼女は店の中だというのに、彼氏に向かって叫んだ。彼氏はそれを咎めようとせず魂が吐き出されるほどの溜め息を吐き出した。まずW〇iから厳選しなきゃならない所が億劫だった。彼氏はそのまま棚を見渡した。

「せめてジャンルぐらいしていろよ」

「あ？んー…」

彼女はそのまま固まった。考えてもいなかったらしい。そこまで適当なのかコイツは。

「いいよ。適当に薦めてくから」

と、彼氏は棚の端から端を舐めるように見回った。彼女はまだ考えていた。

すると、一枚のゲームに目が止まった。棚から引き抜くと、それからジッとケースの裏表紙を眺めていた。気になり彼女が寄ってきた。

「何見てんの？」

「いや昔な、気になってはいたんだよコレ」

と、彼氏は表紙を返した。

「RPGなんだけど、基本的なゲーム要素がしっかりしてるって、

評判あつたんだよな」

「FF?」

「近いんじゃないか？まあやったことはないが。音楽も植松さんだし」

彼女は彼氏の手からケースを引つたみると、表紙と裏表紙を何度も裏返しながら見た。彼女も興味が出てきたようだった。

「じゃあ買えば？」

「そうだな、やってみたくなった」

彼氏は彼女からソフトを受け取ると、そのままレジへ向かった。

数分後、帰り道。

彼氏は家路を楽しそうに歩いていた。一番買ったゲームに対する愛情が見える瞬間だ。久々のRPGだ。足取りが軽く感じてたその時だった。

「…って、なんでデメエのゲームだけ買ってたんだ！」

「こっふっ！？」

彼氏は背中を強く蹴られ、その場に転がった。すっかり忘れてしまったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0941y/>

---

中古ゲームの香り

2011年10月31日18時20分発行